

Title	Lieut-Colonel Howard-Bury, D. S. O, and other members of the Mount Everest expedition: Mount Everest, the reconnaissance
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.2 (1923. 2) ,p.100(260)- 101(261)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0102">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0102</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

求めたることの争ふべからざるものがある、支那政治史の過去は貴族政治と専制政治との一大争闘であることも、この際承知し置くべきことで、佛教徒は全然この渦中に巻き込まれ幾んど溺死せんとしつゝ、あつたといふことも過言ではないと、次の第八篇、駟僧、牙僧、及び牙行は支那税源を歴史的に考察したもので前篇に勝るとも劣らない有力な論文である、著者のいふ如く、支那各種税源に對する歴史的考察を試みることは極めて煩瑣な事業であるけれども、この民族の政治史、經濟史に密接してゐるものといはなければならぬ。興味多いとはいへ、著者が此の煩瑣な研究に盡され、われらの此の方面の蒙を啓かれたことは、われらの感謝と喜びに堪へないところである。

次にもう一つ注意すべき論文である第四篇支那社會の階級闘争(七十九頁―百頁)は封建崩壊から奴隸問題發生までの徑路を檢計したものである。著者は「古來の社會階級及びその闘争に就いて檢究するに至つたのは此の問題が從來一般學界からも閑却されてゐる傾があるためだ」と述べ、其の閑却されてゐる理由として「これまで外人ことに日本人に讀まれてゐた支那文獻は多くは治者の記録であるけれども被治者のものではない、政治的のものであるが、社會的ではなかつた。これらの事情は自から觀察を一方面にのみ局限したわけであるに違ひない。しかし、それは主なる理由では無いのである、主なるものは一般學者間には、支那は上古から平等的の社會生活を營みてゐたと解釋するからである」と論じ、結論として「封建制度の完全に支持せられてゐた西周時代には有姓者と無姓者との兩階級が對立してゐた。そしてその性

質は征服者被征服者といつた形式の下に置かれてあつた奴隸の存在は認めなければならぬ。しかし奴隸は多くの場合罪徒の苦役を指すのであつて、所謂奴隸問題を發生するまでには進まなかつた。封建制度崩壊による姓氏の特權が失はれたことは支那民族の階級闘争史上に特筆しなければならぬであらう云々と述べてゐる。

次に附録の第四篇、支那に於ける回教徒(四百十―四百二十二頁)も是非注意するを要する。由來回教徒は支那の文化に密接な關係をもつてゐる。將來支那を研究せんとするものは勿論、支那に於ける上流階級の復古運動や所謂青年支那黨の文化運動にも注目する必要があるが、しかし支那に於ける回教徒に關しても研究するところなくてはならぬ。現今支那に於ける回教徒は驚くべき多數に達してゐる。即ち最大數八百萬至九百萬に出入し、最小限四百四五十萬であると解せられてゐる。

以上は主要な點を紹介したに止まる。從來此の方面の研究は比較的閑却されてゐる憾があつた。これは一に材料の過多と材料を取扱ふ上に起る種々の難關に起因する。われらは此の難關に打勝ち支那社會の本質を會得しなければならぬ。此の時に當り支那社會史研究が公にせられたのはわれらの欣快とするところであつて、松井等の東洋文化觀と共に是非一讀を大方諸賢に勧めて已まないものである。(宮島貞亮)

members of the Mount Everest Expedition:  
Mount Everest, the Reconnaissance, 1921.

極地の探險に成功した人類は今世界一の最高峯にその足跡を印し、かつ人間の體力が如何程の高度まで堪えられるかといふ事を試さんがために苦闘してゐる。本書は一九二一年英國人によつてマウンツ、エヴェレストに對してなされた遠征記録である。英國山岳會及び地學協會員の贖金を主として約一萬磅の遠征費用が集められ、印度政府を通じダライラマの入國許可を得て一行の先發隊は五月十八日ダーヅリシグを發し、シツキムを過ぎ、チベットに入つた。途上ケラスが病死したのは探險隊の遭遇した第一の悲劇であつたが一ヶ月を費してチイングリにつき、此處を根據地として南エヴェレストに向つた。先づ山の西北なるケトラツクの谷に入り、次いで山の西面なる谷に往復し、それより北面のロングブツク谷に入り、マロツクとパロツクは此谷の上方氷河から登らうとしたが、果さず、一行は東してカルタの谷に入り、次いで東面のカマの谷に入り、此谷よりエヴェレストに近づかんとしたるも之も亦失敗し、再びカルタに歸り、モンスーンの季節を終へてから九月中旬カルタの氷河を登り、二二、二三〇尺の隘路を越えて東ロングブツク氷河に下り、エヴェレストの北尾根にとりつかんとした。即ちカルタ谷の原頭二万フ井ートの宿營地を出て、九月廿二日はラクパラの隘路（二二三五〇）まで登つて宿營したが、それより先は多人數の前進困難となり、たゞパロツク、マロリイ、ホイラーの登山専門家のみ強健な強力をつれて前進し、二萬二千

フキートの東ロングブツクの氷河に宿營し、次いでエヴェレストの北尾根たるチャンラ二萬三千フキートに達したがパロツクは睡眠不足のため疲れ、ホイラーは足の間覺を失ひ、マロリイのみなほ二千フキート登れる自信があつたが、天候の險惡、苦力の不足のため遂に前進を斷念して引返した。同地點より頂點まで二哩半、一晚の幕營にして征服は望みえられたのであつたと云ふ。意志の強固な英國人の事であるから再三再四の遠征に近い將來の中には必ず此高山を征服して終ふことであらう。因に新聞紙に喧傳せられた「ヒマラヤ氷上に住む山人の足跡」と云ふのは實は灰色狼の足跡なのださうだ。又此世界一の高山に對しエヴェレストといふ測量者の名をとつてつけた山名の外にチベット語で國土の母神を意味するチヨモ、レンマ、山の母神チヨモ、レンモ同じくトルコ玉のヒークの女神チヨモ、ウリなごといふ古名があることを本書中に言及してゐる。フレンシフキールドは The Geographical Journal の本書の批評中に政府が地圖の上に此古名を保存せんこと、エヴェレストを含む山脈全體にチヨモ、レンマの名を與へむことを勸告してゐるが之は吾等東洋人の意を得たる意見と云はればならぬ。（松本信廣）

## 大正十一年度雜誌主要論文

大正十一年度の「歴史哲學」概観  
雜誌に表はれたる

私は、歴史に對してはほんとうの門外漢で、何にも分らないが、